（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）

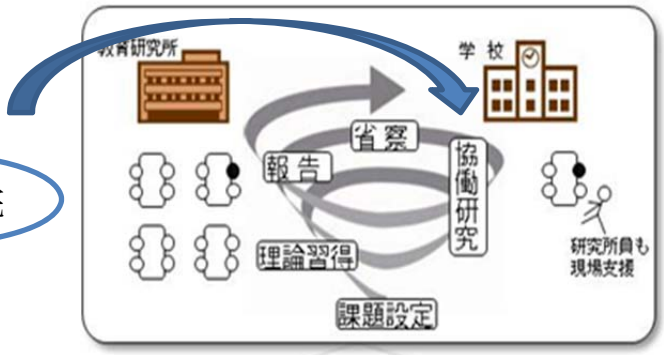
教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

実　施　報　告　書

プログラム名	大学と教育委員会の協働によるミドルリーダーの資質向上に向けた研修システム（ミドルステップアップ研修）の開発
プログラムの特徴	福井大学教職大学院では、福井県教育委員会（福井県教育研究所）が毎年開催している中堅教員のための集中研修（ミドルリーダー研修）を見直し、双方で協働して新しいスタイルのミドルステップアップ研修を企画し、教員の資質能力向上に向けた調査研究を実施する。 平成23年度には県教育委員会から基本方針として「学校拠点方式の拡充と県教委と福井大学との連携強化による校内研修の充実を軸とした研修システムの確立」が示され、平成24年度にはこれまで行ってきた県のミドルリーダー研修を見直し、学校現場での実践に軸足を置いた新しいスタイル（「通所型研修」と「訪問型研修」の混合）に切り替え、より実践力に結びつくシステムを開発した。これにより従来の単発的情報獲得型の研修から「課題設定→理論習得→事例研究→現場での協働実践→省察→次の課題設定」というプロセスを組み込んだ通年型の新しい研修へと改善が図られた。「学校経営」と「学習指導」の2コースを設けそれぞれの資質能力のステップアップをめざしていくが、それらが互いに関連し合う一貫性のある研修として設定した。平成25年度には基本研修システムの試行にも取り組み、連携の強化を図ってきている。平成26年度は、福井大学教職大学院が主催するラウンドテーブルにて研修成果の報告の場を持つこととした。これにより、受講者が取り組んだことを記録し、省察しながらさらなる次の構想をデザインしていくという省察的実践力を培っていく。 また、支援者たる研究所員の力量向上のため、月1回の研究所員と教職大学院の協働研究会を持つ。さらに今年度はラウンドテーブルにて「教員研修」のゾーンを設けて、全国各地の教育センター指導主事等との語り合いの場を設定する。

プログラムの全体概要

教職大学院



リーダー個々の知識・技能習得 → リーダー研修を通した学校全体の教育力向上

年間を通したプログラム

・問題解決型のサイクルで実践と省察の積み重ね

所員が学校を訪問して実践を支援

・課題の解決に向けて現場の同僚と共に考える

学校での実践そのものが研修

・知識獲得だけの研修から脱却し、学校改善を目指した実践を研修として位置づけ

福井大学教職大学院と研究所の連携

・企画、運営、研修の講師などで教職大学院スタッフと教育研究所所員の協働

ミドルステップアップ研修

□研修者の「個々の知識習得」→研修を通して「学校全体の教育力向上」への転換
□現場での実践も研修とするプログラム
- 教育研究所員と大学教員が学校現場に出向き、実践研究をサポートする理論と実践を融合するプログラム
- 実践報告レポート作成を教育研究所員がサポート
- 報告会では、多角的な視点からのアドバイスを得られるクロスセッションを設定

□年間を通したプログラム
- 課題設定→理論習得→事例研究→現場で協働実践→省察

	内容
1日目	これからの学校経営を担うミドルリーダーの課題
2日目	学校経営の理論・授業研究の理論と事例
3日目	学校環境分析　授業の読み取り方
所属校で	校内実践・実践レポート作成
4日目	実践報告会・クロスセッション
所属校で	最終レポート作成
5日目	振り返りと今後の展望

□同一研修を、複数会場で実施するなど、柔軟な運営
□通算36時間の研修という系統立てた教員研修設計、および最終レポート報告書による評価の可視化による単位化への布石
□4日目「クロスセッション」に、教職大学院スクールリーダー養成コースの院生が参加することで、実践の意味の明確化とさらなる多角的な視点を提供

Ⅰ　開発の目的・方法・組織

１　開発の目的

今日、新たな学びを支える教員の養成と、学び続ける（研修の継続）教員像の確立が必要不可欠であり、中教審「教員の資質能力向上特別部会」からも大学と教育委員会の連携・協働を強く求められている。こうした観点から、福井大学教職大学院では、福井県教育委員会（福井県教育研究所及び福井県特別支援教育センター）が毎年開催している中堅教員のための集中研修（ミドルリーダー研修）を見直し、双方で協働して新しいスタイルのミドルステップアップ研修を企画し、教員の資質能力向上に向けた調査研究を実施する。

平成 23 年度には県教育委員会から基本方針として「学校拠点方式の拡充と県教委と福井大学との連携強化による校内研修の充実を軸とした研修システムの確立」が示され、平成 24 年度にはこれまで行ってきた県のミドルリーダー研修を見直し、学校現場での実践に軸足を置いた新しいスタイル（「通所型研修」と「訪問型研修」の混合）に切り替え、より実践力に結びつくシステムを開発した。これにより従来の単発的情報獲得型の研修から「課題設定→理論習得→事例研究→現場での協働実践→省察→次の課題設定」というプロセスを組み込んだ通年型の新しい研修へと改善が図られ、それらが互いに関連し合う一貫性のある研修として設定した。さらに平成 25 年度には、研修に関わる指導主事等の力量形成や大学との連携による初任者研修システムの試行にも取り組み、連携の強化を図りつつ研修カリキュラムをより充実させてきている。今後もこのミドルステップアップ研修を土台として、初任者研修、5 年経験者研修、10 年経験者研修、管理職研修などの基本研修の流れの基盤を作り、さらなる充実を目指していく。そのため今年度は福井大学教職大学院が主催するラウンドテーブルにて、支援者たる研究所員の力量向上のため、「教員研修」のゾーンを設け、全国各地の教育センター指導主事等との語り合いの場を設定し、次の改善への契機とする。

２　開発の方法

スクールリーダー約 30 名を対象として、年間 7 回の通年研修を基本とした「ミドルステップアップ研修」を実施する。「学校経営」と「学習指導」の 2 コースの選択とし、現場でのカンファレンスを交えた訪問研修の場を特徴としている。従来の単発的情報獲得型の研修から「課題設定→理論習得→事例研究→現場での協働実践→省察→次の課題設定」という新しいプロセスを組み込んだ本研修に対して、研修における講師派遣、福井大学教職大学院でのクロスセッション、ラウンドテーブルでの発表等、大学と教育委員会が協働でシステムの開発にあたっている。そのために月 1 回の協働研究会の場を設け、お互いの研鑽を図っている。平成２６年度は協働研究会に加えて、連携協議委員会を設けて、内容の充実を図っていく。また、受講者の省察的実践力の向上を図るために「福井大学ラウンドテーブルにおける研修成果報告」や全国の教員センター指導主事との語り合いの場を設けるための「教員研修ゾーン」の設置などの新たな取り組みを加え、さらなる内容の充実を目指して取り組んでいく。

３　開発組織

No	所属・職名	氏　名	担当・役割
1	福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻教授	松木　健一	事業責任者
2	福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻准教授	小林　真由美	事業対象への連絡調整等
3	福井県教育研究所主任	冨澤　宏二	研修担当者
4	福井県特別支援教育センター指導主事	船谷　和代	研修担当者

連携協議委員会

福井県教育研究所研修部

福井大学教職大学院研究所担当チーム

Ⅱ　開発の実際とその成果

ミドルステップアップ研修講座

○研修のねらい

ミドルステップアップ研修では､学校のミドルリーダーとして活躍している教員が、理論の学習･協議および勤務校での実践を通して自らの力量を向上させるとともに、各校の中核的存在として勤務校の学校力の向上も図ることを目指している。大量退職時代を控えて、ミドルリーダーが中核として職場の同僚性を高め、組織的に若手教員に教育技術等を伝えることや、組織マネジメント力や危機対応等の管理職としても求められる資質能力を身につけることが必要となっている。

○研修の目標

①　受講者の教師力向上について検証する

・１年間の継続した実践を通して、勤務校の同僚性を高めたり、校内研修会を活性化したりすること。

・ミドルリーダーの役割について、よく理論と事例を学ぶこと。

・受講者や教職大学院スタッフ・院生と協議することで、ファシリテーション力や傾聴力を高めること。

・研修テーマに取り組み勤務校の実践力を向上させることで、資質能力を向上させること。

②　学校力の向上について検証する

・参加者のテーマが学校力の向上に直結していること。

・学校全体の授業力向上や教員の資質向上を推進すること。

・受講者同士が協議することによって、共通する課題解決を図ったり校種間連携を進めたりすること。
・管理職による授業改善指導の強化に協力すること。

③　運営全般について検証する

・効率的かつ効果的な集合研修を実施すること。
・要請に応じて、効果的な訪問研修を実施すること。
・年間を通して継続的な支援を行うこと。
・指導主事自らが、教員を指導する能力を高めること。

○開催日程

日　　程	研　　修　　内　　容
6 月 3 日	①　主題設定 ➢　所属校の現状を踏まえ、自身の課題を設定する。 「これからの学校経営を担うミドルリーダーの役割」　山下忠五郎
6 月 21-22 日	福井ラウンドテーブルへの参加 課題解決の方法等成果報告
6 月 25 日	②　理論と事例 これからの学校経営、授業研究の在り方や、先進事例を学ぶ。 （経営）「学校経営の理論」 福井大学教職大学院教授　二宮秀夫 グループ協議「実践課題について」 （学習）「授業研究の理論と事例」 福井大学教職大学院准教授　木村優 グループ協議「実践課題について」
8 月 2 日 8 月 5 日	③「学校を取り巻く環境分析と解決策」・「授業研究の進め方」 所属校での実践 ➢　課題解決に向けた取組 ➢　実践記録の作成 地域ごとの合同カンファレンスで情報交換 教育研究所員の支援
12 月 26 日	③　**実践事例報告** ➢ 学校改善事例、授業研究実践事例報告（クロスセッション） 所属校での実践　　最終事例報告レポートの作成
1 月 16 日	⑤　振り返りと今後の展望　リーダーとしての取組みを振り返る。 「校内研修活性化のためのミドルリーダーの役割」 東京都板橋区赤塚第二中　岡部　誠教諭
2 月 14 日	宇都宮ラウンドテーブル（教師改革コラボレーション）で発表
2 月 28 日 3月1日	・福井ラウンドテーブルで受講者の研修成果を発表する ・「教員研修」ゾーンを設置し、支援者から研修成果を報告する

○研修内容と受講者の声

①６月３日(火)13:30～16:30　教育研究所第１研修室
開講式・挨拶　県学校教育政策課参事　北川　裕之
　　教育研究所長　　小和田和義
講義「これからの学校経営を担うミドルリーダーの役割
　　福井大学教職大学院非常勤講師　山下忠五郎
グループ協議「所属校の現状をふまえた自身の課題設定」

・講師の熱意が伝わり、意識が高まった。「学びを変える」という言葉が印象に残った。
・何かを変えようと本気になることを見つけたい。
・本年度、校長と教頭が替わり、スクールプラン等も新しくなった。それと今回の内容が全く同じだったので、4月から取り組んでいることに、間違いがないと確信できた。

②６月25日(水)9:30～16:00　教育研究所第１研修室
講義「学校組織マネジメントとミドルリーダーの在り方」
　　福井大学教職大学院教授　二宮　秀夫
講義「授業研究の理論と事例」
　　福井大学教職大学院准教授　木村　優
グループ協議「自身の課題解決に向けた取り組み」

・学校は改革をするために、変化を求め続けるものだという視点が共感できた。自分自身も組織改善を目指す一員として主体的にならなくてはならないと自覚した。
・現状分析の方法（ＳＷＯＴ分析など）は、ぜひ取り組みたいと感じた。
・授業研究の観点がすっきりと整理されていて、分かりやすく、とても参考になった。
・授業を見る際にいかに制限された視点からしか見ていなかったかを痛感した。

③８月２日(金)13:30～16:30　教育研究所第１研修室
講義・演習「学校を取り巻く環境分析と解決策」
　　県生活安全課　主任　金森　誠
８月５日(月)13:30～16:30　教育研究所第１研修室
講義・演習「授業研究の進め方」　　本所所員

二日間のうちの一日選択

・ＳＷＯＴ分析の概略は知っていたが、実践的事例を通して技法・手法を知ることができた
・他校の先生と意見を出し合い、解決策を見つけるロジックツリーはたいへん良かった。
・いろいろな研究会の持ち方があるということを知り、実践していきたいと思った。
・子どもをどう見ていくか、発言や表情を見逃さないよう、試行錯誤を繰り返していきたい

④12月26日(金)13:30～16:30　福井大学文京キャンパス
グループ協議「実践の事例報告」
　福井大学教職大学院スタッフおよび福井大学教職大学院スクールリーダーコース(Ｍ１)とのクロスセッション
[ｸﾛｽｾｯｼｮﾝ：構成ﾒﾝﾊﾞｰをﾐﾄﾞﾙ受講者・院生・大学院ｽﾀｯﾌとした小ｸﾞﾙｰﾌﾟの中で、互いの実践を語り合い、傾聴し合う場のこと]

・話をすることで、まだまだ言い足りない点、うまく伝えられない点がわかりました。
・50分という持ち時間は長いと思ったが、やってみるとあっという間に終わってしまった。これぐらいでちょうどいい設定だと思う。
・学校の中の役割が明確になり、ぼんやりとしていたものがはっきりとしたことで、仕事の見通しが立つようになった。

⑤１月16日（金）13:30～16:30　教育研究所第１研修室
実践報告「県外先進校の取り組み」
　　板橋区立赤塚第二中学校主幹教諭　岡部　誠
グループ協議「１年間の振り返りと次年度の課題設定」
修了証書授与
閉講式

・研修を始めた時は、考えを話し合いの場に出すことに慣れなかったが、回を重ねグループを組んだ先生と考えを交流させることができるようになった。

・岡部先生の話は本校での取組みに関わっている部分もあって、興味深く聞くことができた。いろいろな励ましも頂きありがたかった。
・リーダーとしてのコミュニティー作りなど非常に参考になった。協働的組織の構築も参考にしたい。
・同じような想いを持つ人がいることは心強いと思いました
・異校種の先生方との語り合いは、新たな気づきを多く得ることができた。福井型18年教育の中での小学校教育が目指していくべきものを考えてみる良い機会となった。
・福井大学で行われた院生や、ファシリテーターとのセッションも非常に得るものが多く、あのような機会が多くあるとよいと思う。

○研修の成果

①アンケート調査

受講者に対して、12月26日の４回目の集合研修（クロスセッション）時に、活用に関す

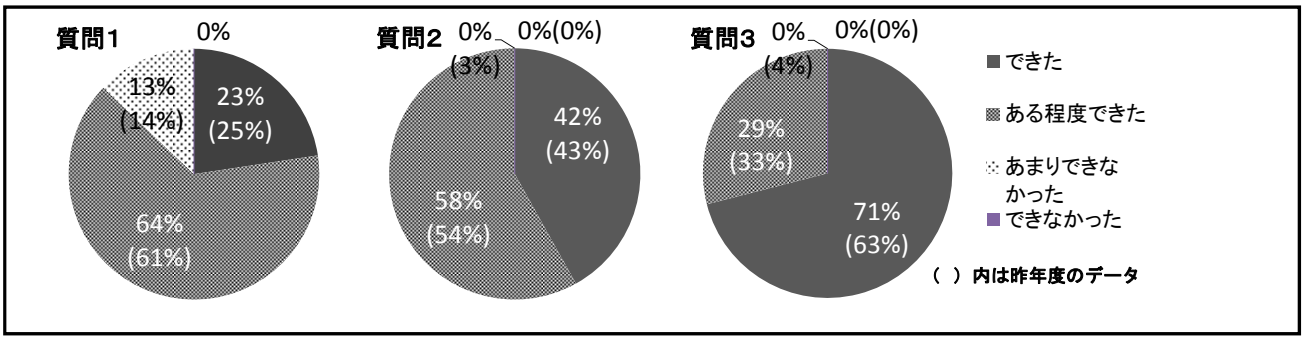
るアンケートを実施した。

質問１　御校において研修テーマの取組みを推進することができましたか。（４択及び自由記述）

質問２　集合研修は取組みに役立ちましたか。（４択及び自由記述）

質問３　訪問研修は取組みに役立ちましたか。（４択及び自由記述）

質問４　御自身のミドルリーダーとしての資質能力の向上に関してどう思うか。（自由記述）



［自由記述欄］

・組織として取り組むことができるようになった。

・テーマが学校が抱えていた問題に関するものであったため、学校においても役立つものとなった。学校長の協力が大きかった（校外活動）

・自分の働きかけが連関して、小集団ではあるが動き始めた感がある。

・授業の見方の講義が特に良かった。校内の授業研究会で生かすことができた。

・今までの考えや取組を振り返り、自分の立ち位置を確認できた。

・他校の先生方や校種の違う先生の意見や取組を知ることができた。

・考えるきっかけ、切り口になることがたびたびあった。

・教職大学院や特支センターの先生に来ていただき、いろいろなことを学ぶことができた。そして、それを全教職員で共有することができた。

・学校内の教員からは出ないような意見や考えを聞くことができて大変参考になった。また、自分の取組を校内で理解してもらえた。

・誰か任せにしていたことを、自分でやるようになり、自分が進んで引き受けることがいくつも出てきました。学校の仕事に積極的に取り組めるようになった。

・学校内での自分の役割が明確になった。これまでぼんやりと曖昧だったものがはっきりとしてきて、仕事の見通しが立つようになった。

・この研修を通して、ＩＣＴの活用など新しい試みをすることができ、良い機会が得られたと思っている。

・研究会を校内で立ち上げ、中心となって進めることの難しさを体験した。思うように研究が進まず、苦労することもあったが、貴重な体験をすることができた。

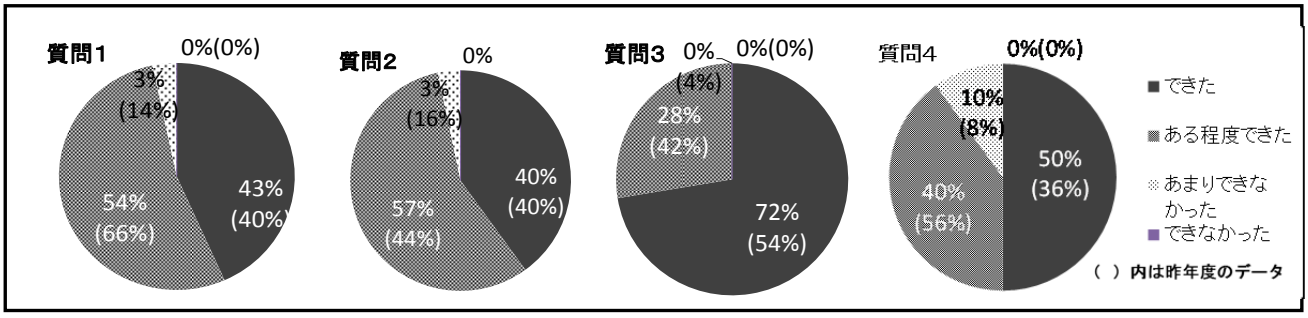
管理職に対して、１２月にアンケートを実施した。（いずれの質問も4択及び自由記述）

質問１　受講者の取り組みは、御校の学校力向上に結びついていますか。

質問２　受講者は、研修を生かして学校全体の授業力向上や教員の資質向上を推進できたでしょうか。

質問３　御校の要請に応じて本所が実施した訪問研修は効果的だったでしょうか。

質問４　この研修は、貴職による授業改善指導の強化等、学校経営に協力することができたでしょうか



［自由記述欄］

・授業公開と授業研究会の開催で、校内研究会という必修の研修ではなく、自主的に研修しようとする意欲を喚起できた。授業力の向上には、自ら学び、学び続けようとする意欲こそ大切だと思う。初任研指導教員として指導に当たった3人の教員をはじめ、多くの同僚に受講者自らの教育理論と実践を語り、それを受けてそれぞれの思いを語り合ったことは、教員の思いをそろえることにつながったと感じている。

・この講座に参加することで、受講者はミドルリーダーとしての意識が高揚し、学校を運営する上での大きな力となっている。

・受講者は生徒指導主事であり、校内のベテラン教員が実践研究を行ったことが、学校全体に好影響を与えたという点で効果的であったと考える。また、校内にミドルリーダーとしての自覚をもつ教員や学校経営に係わる知見を研修した教員が一人でも多くいることは、学校経営に活かせると思っている。

・本人のテーマが学年主任としてのステップアップであり、当該学年団への影響について効果があった。次年度は３年学年団となるので、期待したい。さらに、本人には、研修の経験を、学年主任を終えた後の部長、さらには管理職をめざすリーダーとしての活躍が期待できる。

・受講者は、県内工業学科の授業を向上させようとする話し合いが始まり、そのメンバーとして選ばれた優秀な教員であるが、自分の学校だけではなく県内全体の工業学科がどのような授業展開をすればよいかを考えるきっかけとなった。また、広い視野で自校と他校を比較したり各人の長所を見つけて組織としての実践に取り組むようになったことは大きな収穫である。

・他校の優れた実践をもとにした教職員のコミュニケーションは増えた。

・大規模校に属する本校では職員の思いや考えを把握することは難しい面がある。しかし、校内研修会での楽しい学校にするための実効策の検討で、戦略マップに貼られた付箋から、各職員の考えていることを知ったり、私が気づかなかったアイディアを得たりすることができた。

②アンケート結果からの分析

受講者アンケート、校長アンケートともに、その結果は昨年と余り変化はないが、訪問研修に関する評価は、昨年を上まわっている（受講者で「できた」という回答が８ポイント、校長で「効果的だった」という回答が17ポイント）。この結果は今年度、訪問研修に福井大学教職大学院スタッフ等との連携ができたことが、内容の充実につながり、評価も高まったと考えている。

また、受講者の教師力について、１年間の継続した実践を通して、勤務校の同僚性を高めたり、校内研修会を活性化したりすることにたいして「できた」「ある程度できた」の

合計が87.1％と、多くの受講者が成果を認めている。さらに集合研修が「役に立った」「ある程度役に立った」の合計が100％であった。講義・演習でミドルリーダーとしての役割・すべきこと、SWOT分析、授業研究での授業の見方等を提供し、その上で学校現場での実践につなげることができた。すなわち、「理論と実践の融合」が機能している結果だと考える。

学校の教育力に関して、所属長のアンケートでは、全て(特別な事情を除く)が「結びついている」あるいは「ある程度結びついている」と回答しており、受講者のテーマが学校力の向上に直結していることがわかる。具体的には､授業改善や校内研究体制の充実、進路指導体制の充実、学校運営全体に関わるものがあげられ、勤務校で中核的な役割を担っていることがわかる。

次いで、学校全体の授業力向上や教員の資質向上の推進に関して、アンケートでは、96.5％の学校長が「できている」あるいは「ある程度できている」と回答している。研修テーマの推進について受講者が22.6％が「できた」と回答したのに対して、所属長の「できている」は37.9％と高い評価である。また、管理職による授業改善指導の強化に協力することに関して89.7％の学校長が、「できた」「ある程度できた」と回答している。今年度は校長から直接意見を聞き取る機会はとらなかったが、管理職の学校経営に協力する体制はできていると考えられる。

③成果

昨年同様、所属長アンケート・受講者アンケートとも、90％以上が「要請研修は効果的だった」「ある程度効果的だった」と回答している。具体的には、受講者への支援に対して効果的だったとの回答が多かったが、それ以外にも校内研究会全体、若手教員への指導・助言、さらには協働の大切さを再確認することに効果的であったとの評価の声が寄せられた。

前半３回の集合研修では、毎回グループ協議の時間を設定し、課題の明確化や実践プランについて意見を交換し、考えを深める場を設定した。おかげで、その後の実践に備える意識が高まり、実践がより機能的になった様に感じている。

グループ協議のメンバーは、なるべく同じ顔合わせにならないように配慮し、多くの人と交流できることを心がけた。同じ校種の受講者同士を同一グループにしたり、逆に別な視点からの助言を得たい場合には、校種をばらしたグループにするなど戦略的に設定したことも効果的であった。

設定された課題が似ている受講者同士が、研修時以外にも情報交換し、横の連携を深める場を設定しようと計画していたが、結果的には昨年と同じ２回の実施で終わってしまった。一つは定時制・通信制高校の合同カンファレンスで、もう一つは「大学入試制度改革」に関する勉強会である。前者は３校から参加者を得ることができ、福井大学教職大学院の森教員からは「学校を越えた協働のきっかけ」との評価を得た。また、12月に実施した後者は、参加者27名(研究所所員含む)と大変盛況であった。中教審や教育再生実行会議が示す方向性を学ぶ事で、今後の変化を予感するとともに、これまでの固定観念を打破しなくてはならないと強く感じる時間となった。

今年度の集合型研修については昨年を踏襲しつつも、講師に何人かの変更があり、より充実した内容にできたと自負している。いずれの講義も受講者には評判が良く、新しい知

見、理論を提供できた。特に５回目の東京都板橋区立赤塚第二中学校岡部主幹教諭の話は、受講者の先達として、これからの自らの姿に重なるものであった。

訪問研修については、今年は福井大学教職大学院スタッフ等にも加わっていただき、より充実した校内研修会ができるよう苦心した。訪問には事前の打ち合わせを通して最も適切な所員、スタッフが当たるようにして、ミスマッチがないようにつとめた。受講者が取り上げる様々な課題に対して柔軟に対応できる所員の力量向上とスキルアップは、これからも継続する課題である。今後とも、所内の対応システムなどを改善していきたい

実践報告の原稿からは、受講者がそれぞれに工夫しながら熱心に実践に取り組んでいる姿がよく伝わってきた。しかしいくつか訪問研修に関する記述がなかったり、少なかったりするものが見受けられた。これはミドル研修本来の趣旨が受講者へ説明不足だったのではないかと反省している。実践報告書の内容については、途中で「章立て」などを確認する機会もなく、内容を練り上げる余裕がないので、これも来年以降、改善していきたい。

○訪問研修としての取組

①　今年度のポイント

今年度のミドルステップアップ研修講座は昨年実施した（1)学校拠点方式の採用と１年間の継続した取組み、（2)クロスセッションの導入、（3)集合研修と要請研修の組み合わせ、（4)講座の一本化、（5)受講対象者の募集方法（以上、詳細は前掲論文）を踏まえつつ、受講者の所属校からの要請に基づく研修（今年より研究所が主体となって訪問するという観点から「訪問研修」と呼称を統一）のより一層の充実を図った。具体的には、昨年までは所員が訪問していたものを、今年度からは可能な限り福井大学教職大学院スタッフ等にも加わってもらい、支援内容の充実に努めた。

②　訪問研修の内容

所属校での実践にあたっては、第１回から第３回の研修を通して浮かび上がってきた自身と所属校の課題に基づき、校内での実践方法と時期を決めてもらった。それを担当が聞き取り、内容に応じて訪問する所員の人選や時期の調整を行った。人選にあたっては、なるべく研究内容とマッチする所員が対応できるように配慮したが、一般的な内容については担当が対応することにした。また、あわせて福井大学教職大学院とも連絡を取り、参加できる大学院スタッフの調整も行った。こちらも内容の専門性に合わせて、こちらから特定の大学院スタッフをお願いした場合もあったが、逆に日程さえ合えば手が空いている大学院スタッフが訪問する場合もあった。

平成 26 年度　　E131ミドルステップアップ研修　　訪問研修一覧

番号	学 校 名	実施日	参加者	所員	福井大	合計	内容	
1	A小学校	1月20日 （火 ）	8人	1人	1人	10人	食育の授業と研究会	1
2	B小学校	9月19日 （金 ）	1人	2人	－人	3人	ＩＣＴ活用のための打合せ	2
2	B小学校	11月10日 （月 ）	9人	2人	－人	11人	ＩＣＴ活用のための校内研修会	3
3	C小学校	8月25日 （月 ）	7人	2人	1人	10人	ＳＷＯＴ分析・ロジックツリーを利用した事業検討会（班別ウォークラリー）	4
4	D小学校	11月17日 （月 ）	27人	2人	1人	30人	いじめを生まない学校作りのための研修会	5
5	A中学校	9月30日 （火 ）	8人	3人	－人	11人	思いやりのある心豊かな集団作り。前期生徒会の成果と課題を踏まえた後期生徒会活動の検討。	6
5	A中学校	10月7日 （火 ）	1人	2人	－人	3人	前回の振り返り	7
6	B中学校	1月6日 （火 ）	7人	2人	－人	9人	1年学年会での「総合的な学習の時間」の検討	8
7	C中学校	11月18日 （火 ）	2人	2人	－人	4人	ＩＣＴ機器の活用を通した授業の実践	9
8	D中学校	8月18日 （月 ）	5人	2人	－人	7人	学校教育課題の現状分析と今後の運営企画	10
9	E中学校	12月15日 （木 ）	30人	2人	1人	33人	授業のユニバーサルデザインについての校内研修会	11
10	F中学校	9月30日 （火 ）	4人	1人	－人	5人	体育科としての生徒指導について	12
11	G中学校	9月25日 （木 ）	10人	3人	－人	13人	公開授業（道徳）と授業研究会（事前検討会）	13
12	A高校	11月12日 （水 ）	15人	2人	－人	17人	公開授業（国語）と授業研究会	14
13	B高校	9月30日 （火 ）	2人	1人	－人	3人	部活動指導の顧問間の連携について	15
14	C高校	9月19日 （金 ）	6人	2人	1人	9人	数学科の反転学習についての研修会	16
15	D高校	9月11日 （木 ）	5人	2人	1人	8人	国際化英語コースの特色作りについての研修会	17
16	E高校	8月29日 （金 ）	15人	2人	1人	18人	ルーブリック評価表（課題研究発表）研修会	18
17	F高校	11月6日 （木 ）	3人	4人	3人	10人	通信制高校における学習評価（合同カンファレンス）	19
18	G高校	12月1日 （月 ）	6人	1人	－人	7人	商業の知識や技術を地域社会にどのように活用するか、課題研究等実践的活動の方策を検討	20
19	H高校	7月24日 （木 ）	10人	2人	－人	12人	工業学科学力向上の取組について。7月15日（火）に事前打合せ。第1回7月24日（木）。	21
20	I高校	10月9日 （木 ）	5人	2人	－人	7人	学校設定科目「観光」に関して授業研究	22
21	J高校	11月12日 （水 ）	6人	1人	－人	7人	2年学年会として、3年生に備えて何をするか	23
22	K高校	8月21日 （木 ）	1人	2人	－人	3人	ＩＣＴ（ムードル）を利用した授業の工夫	24
22	K高校	11月12日 （水 ）	1人	1人	－人	2人	ＩＣＴ（ムードル）を利用した授業の工夫	25
22	K高校	12月12日 （金 ）	13人	2人	－人	15人	ＩＣＴ校内学習会（クラウド利用）の実施	26
23	L高校	11月11日 （火 ）	10人	2人	1人	13人	公開授業（国語）と授業研究会の実施	27
23	L高校	11月19日 （木 ）	18人	1人	－人	19人	公開授業（国語）と授業研究会（アクティブラーニング）の実施	28
24	M高校	11月6日 （木 ）	3人	4人	3人	10人	一人ひとりの生徒理解を深めるための取組（合同カンファレンス）	29
25	N高校	9月10日 （水 ）	6人	3人	－人	9人	1年生担任および学年主任に対して、キャリア教育に関するガイダンスを実施	30
26	O高校	11月6日 （木 ）	3人	4人	3人	10人	担任として生徒指導に取り組むための土台作り（合同カンファレンス）	31
27	P高校	11月18日 （火 ）	1人	2人	－人	3人	11月中旬に発表するICT（タブレット）利用法について、研究協議。	32
28	Q高校	9月5日 （金 ）	5人	2人	－人	7人	地域に根ざし、支えられる学校として、今後どのような事を考え、実践していくか。学校開放の持ち方について。	33
29	R高校	10月29日 （水 ）	13人	2人	1人	16人	公開授業（国語）と授業研究会の実施。	34
30	S高校	11月18日 （火 ）	12人	2人	1人	15人	公開授業（国語）と授業研究会の実施。	35
31	A特支学校	8月29日 （金 ）	1人	1人	－人	2人	ＩＣＴに関する打合せ	36
31	A特支学校	9月26日 （金 ）	1人	1人	－人	2人	ＩＣＴに関する打合せ	37
31	A特支学校	11月19日 （水 ）	16人	2人	－人	18人	公開授業と授業研究会（ＩＣＴ利用）	38
			296人	38件76人	11件13名			

以下、訪問研修の内容について具体的な事例を３つ記述する。

１つ目は小学校の事例であるが、全校で 20 クラスの大規模校で、生徒指導に関する校内研修会を開催した。受講者は集合研修で学習したＳＷＯＴ分析を自校に適用し、事前に分析した資料を基に校内の先生方に協議をお願いした。研修会の進行は受講者が担当し、研究所の所員がＳＷＯＴ分析の説明をして、大学院スタッフに講評・助言をお願いした。管理職の協力も得ながら、和気藹々とした雰囲気の中、自由に職員が意見を言える工夫がさ

れていた。研修後、受講者からは「本校は大規模校で職員数も多く、職員間の意思疎通の機会も多くはとれていない。そこでみんなが言いたいことを言える雰囲気のある研修会は意義があった。また、大学院の先生からは生徒理解の方法などを教えていただき、良い研修となった。」との感想をいただいた。受講者にとっても、学校全体の協力関係を構築するミドルリーダーの立場を経験する機会となっていた。

２つ目は中学校における授業のユニバーサルデザイン化の取組である。この学校では、年間を通して授業研究に取り組んでおり、１学期にはユニバーサルデザインについての校内研修会を実施しており、受講者からは２学期の研修会での更なる深化を相談された。たまたま指定された日程では、本所の専門の職員が参加できない日で、かつ学校の日程も動かせなかったので、担当としても対応に苦慮した。大学院に相談したところ、ちょうど県特別支援教育センターから教職大学院に入学している所員を紹介され、研修会を持つことができた。事後、校長からは、「本校の本年度の研究副題は、『生徒一人ひとりの力や良さを引き出す指導の工夫』である。それに基づき、受講者は１学期の校内研究会で授業を提案している。それが全教職員にとって、生徒一人ひとりに目を向けたユニバーサルデザイン研修の出発点であった。そして、その延長線上に今回の研修会があった。すなわち、受講者を核にして、全教職員の研修が連続し深化してきた。受講者の研修が、まさに学校力の向上を促進していた。今回、学校で全教職員が受講できたことが、最も効果的だった。個人が研修に出かけたり、研究発表会に参加したりしても、なかなか全教職員へのフィードバックはむずかしい。今回の研修は、我々全員が一年を通して授業のユニバーサルデザイン化を意識して来た中で行われたものであり、その意味で、全員の意識が揃い共有財産となった。今後とも、この訪問研修を最大限活用させていただきたい。」との感想が述べられた。

３つ目は担当者の発案で、受講者に定時制・通信制高等学校からの受講者３名による合同研修会を実施することとした例である。それぞれの学校で同僚を巻き込み、受講者を含め３名、研究所からも３名、さらに教職大学院からも３名の参加者を迎え、全部で 15 人の参加者で研修会を開催した。当日は異なる学校どうしのグループと同じ学校どうしのグループの協議をそれぞれ行ったことで、内容として学校を越えた共通理解が生まれ、他校の事例に学んだり、自校だけではわからなかったことへの気づきが生まれたりという成果が見られた。受講者の一人は「研究会を校内で立ち上げ、中心となって進めることの難しさを体験することができた。思うように研修が進まず苦労することもあったが、貴重な体験をすることができた。大学院の教員のアドバイスは校内では出ないような意見や考えで、大変参考になった。」と言っている。

以上のように、受講者はそれぞれの立場で校内の教員を巻き込みながら、訪問研修をうまく利用して、さまざまな実践の成果を上げている。そして、本研修のねらいである「ミドルリーダーとして、学校運営や授業改善に必要な資質、能力や実践力を高めること」ができていると考える。

④ 今年度の成果

昨年までの取組の成果に加えて、今年度は教職大学院の教員などによる訪問研修を強化したことで、内容の充実に大きな成果が見られた。

(1)　受講者の教師力の向上について

・１年間の継続した実践を通して、研修テーマの取組を推進すること
アンケートでは「できた」「ある程度できた」の合計で 87.1％の受講生が成果を認めている。
・ミドルリーダーの役割について、よく理論と事例を学ぶこと
集合研修が「役に立った」「ある程度役に立った」の合計が 100％であった。講義・演習は受講者に適切な学びを提供できたと考える。
・受講者や教職大学院スタッフ・院生と協議することでファシリテーション力や傾聴力を高めること
毎回、グループ協議やクロスセッションを実施したことで、そこから刺激を受け、話し合いを通した気づきが得られたことは、事後の感想に多く見られた。
(2)　学校力の向上について
・参加者のテーマが学校力の向上に直結していること
学校長へのアンケートでは、特別な事情によるものを除く全てが「結びついている」あるいは「ある程度結びついている」と回答している。具体的には､授業改善や校内研究体制の充実、進路指導体制の充実、学校運営全体に関わるものがあげられ、受講者が勤務校で中核的な役割を担っていることがわかる。
・学校全体の授業力向上や教員の資質向上を推進すること
アンケートでは、96.5％の学校長が「できている」あるいは「ある程度できている」と回答している。研修テーマの推進について受講者の 22.6％が「できた」と回答したのに対して、所属長の「できている」は 37.9％と高い評価である。
・管理職による授業改善指導の強化に協力すること
89.7％の学校長が、「できた」「ある程度できた」と回答している。今年度は校長から直接意見を聞き取る機会はとらなかったが、管理職の学校経営に協力する体制はできていると考える。
(3)　運営全般について
・要請に応じて、効果的な訪問研修を実施すること
学校長へのアンケートでは、71.4％が「要請研修は効果的だった」、28.6％が「ある程度効果的だった」と回答している。具体的には、受講者への支援が効果的だったとの回答の他に、校内研究会、学年会や部会、あるいは若手教員への指導・助言など周りの教員集団への効果に対する評価の声が寄せられた。
・年間を通して継続的な支援を行うこと
全ての学校に対して、延べ数で 38 回の訪問研修を実施した。事前打ち合わせと授業研究会時の２～３回実施した事例が 6 校であった。昨年度が 43 例であったことを考えると、今年度はやや継続的な支援が手薄になった。次年訪問研修の要請は受講者に任せていたので、早い時期から打合せが始まり、すんなり日程が決まった。日程の調整については、例えば､11 月中には必ず電話連絡をしてもらうなどの締切りを設けておくべきだったかもしれない。以降の課題である。
・所員全体が、教員を指導する能力を高めること
教育研究所では月１回のペースで、指導者として福井大学教職大学院から複数の教員を招いて、所員同士が互いにファシリテーターを務め、様々なテーマについてグループ協

議を行い、力量を高める協働研究会を行っている。また、ＩＣＴ活用やユニバーサルデザインに関する独自の所内研修会を開催して、通信研修や訪問研修に生かせる事項やスキルを学んだり、それらに関する情報交換を行ったりした。それぞれの受講者や学校のニーズに対応できる人材の養成を常に意識して、所内全体として人材の育成を進める必要を感じている。協働研究会の内容は下記の通りである。

4 月 11 日	・協働研究会の目的を共通理解 ・26 年度に扱うテーマを検討
5 月 21 日	・新しい学力観、評価の在り方等、教育界の変化を踏まえ、今研究所に求められていること、果たすべき役割について考える。また、研究や研修の成果等をいかにして発信していくか考える。
6 月 18 日	・新しい訪問研修実施にあたり、新しい学力観、評価の在り方等を踏まえて今求められている授業研究の在り方について共通理解する。 ・子どもの見取りを中心とした授業研究の在り方を考える。 ・前期の訪問研修の取組状況を報告し合い、現状や課題について協議する。
7 月 18 日	・教育研究所が実施する訪問研修の在り方を考える。 各部署より経過報告（研究紀要原稿検討） 各自が取り組んできたことについて下書き原稿をもとに説明し、協議することにより、相互理解を図るとともによりよいアウトプットの形を探る。
9 月 2 日	研究所の研究内容と報告の方向性、進捗状況の確認。 ・今どんな研究に取り組んでいるのか ・どのような報告・発信を考えているのか ・研究と研修をどのように結び付けていくのか
10 月 3 日	・教師力支援の一視点－訪問研修に生かせる学級経営についての基礎的な理論を知り、支援の幅を広げる。 ・福井型 18 年教育を見据えた支援活動の在り方－研究所が県の教育支援機関としての役割を求められている中での現状や課題について協議する。
11 月 12 日	各部署より経過報告（研究紀要原稿検討） 各自が取り組んできたことについて下書き原稿をもとに説明し、協議することにより、相互理解を図りよりよいアウトプットの形を探る。
12 月 10 日	７から１１月に行った訪問研修を中心に、事例を報告し合い、課題や方向を協議。紀要原案検討
1 月 8 日	各自が取り組んできたことを紀要原稿をもとに説明し協議することにより、情報の共有・相互理解を図るとともに、よりよいアウトプットの形を探る。
3 月 18 日	今年度の成果と課題を共有し、次年度取り組むべき内容を協議

このほか連携協議委員会として大学と研究所のチームで研修内容についての打ち合わせの会を下記の通りに実施した。これによって、毎回の研修内容の省察と次回の実践

の見通しを持って取り組むことができた。

第 1 回	4 月 19 日	ミドルステップアップ研修年間計画の確認
第 2 回	5 月 17 日	第 1 回研修、6 月福井ラウンドテーブルへの参加について
第 3 回	6 月 28 日	第 1 回研修の振り返り、第 2 回研修打ち合わせ
第 4 回	7 月 5 日	第 3 回研修打ち合わせ
第 5 回	8 月 22 日	福井市研究主任研修
第 6 回	10 月 11 日	第 4 回研修打ち合わせ・福井ラウンドテーブル打ち合わせ
第 7 回	11 月 15 日	第 5 回研修打ち合わせ、他県との交流について打ち合わせ
第 8 回	1 月 7 日	福井ラウンドテーブル打ち合わせ
第 9 回	2 月 14 日	福井ラウンドテーブル打ち合わせ
第 10 回	3 月 18 日	平成 26 年度研修成果についての検討

さらに、今年度は研修の充実を図るため、担当企画者である指導主事等の力量向上を目標として、福井大学主催福井ラウンドテーブルにおいて「教員研修」のゾーンを設け、福井県教育研究所所員だけでなく全国の教育センターと教職大学院設置予定大学等に参加を呼び掛けた。「新しい学力」を培う上での教師の学習観の転換を図ることが教員研修の緊急課題であり、さらに、教育委員会と教職大学院の連携・協働がこれからの日本の教育の礎となるからである。当日の内容については下記の通り。

Session Ⅰ　**ポスターセッション**　12:40-13:50

教員養成・教員研修に関する教育委員会と大学・大学院の実践をポスター報告
参会者共に実践を交流

Session Ⅱ　**シンポジウム**　14:00-15:20

「学校を基盤とした教員養成と教員研修のあり方」

＜シンポジスト＞　鈴木　寛（文部科学省・参与／福井大学教職大学院・客員教授）
林　雅則（福井県教育委員会・教育長）
伊藤　学司（長野県教育委員会・教育長）
＜コメンテーター＞　佐藤　学（学習院大学・教授）
＜司会＞　松木　健一（福井大学教職大学院・教授）

Session Ⅲ　**フォーラム**　15:30-17:30

「21世紀の教師教育をイノベーションする」

（１）都道府県教育センター、（２）福井県教育研究所、福井県特別支援教育センター、福井県嶺南教育事務所、（３）大学・大学院 の３者からそれぞれの取組と実践を小グループ内で話題提供し、参会者と共に議論を進める。

※話題提供機関：岐阜大学／和歌山大学／大阪教育大学など
福井県教育研究所／福井県特別支援教育センター／福井県嶺南教育事務所
鹿児鹿児島県教育センター／京都府教育センターなど

当日は180人近くの関係者が全国から集まり、盛大な会となった。SessionⅢのフォーラムでは、19のグループで教育センターや大学からの取組と実践について報告され、それについて熱い議論が交わされた。「ポートフォリオ形式で教員個人が研修計画を立てる」「研修カルテを自分で作成する」など行政・大学が何をするかという視点でなく、一人の教師がどう学ぶかを自分で考えていくという研修の主体性について提案され、ミドルステップアップ研修にも、こうして教員人生のロードマップを自己形成するという理念が新たな課題として見えてきた。

キーワード：学校実践　省察　協働研究　大学との連携　訪問研修　クロスセッション
教職大学院　ラウンドテーブル
研修対象者：C(30名)
研修日数：C（7回）

問い合わせ先

●申　請　大　学　　国立大学法人 福井大学
所　　在　　地　　〒910-8507福井県福井市文京3丁目9番1号
担　　当　　者
所属・職名　　福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻　准教授
氏名(ふりがな)　　小林　真由美　（　こばやし　まゆみ　　）
TEL/FAX　　0776-27-9816
E - m a i l　　kobayasi@f-edu.u-fukui.ac.jp
●連　携　先
連携教育委員会　　福井県教育委員会
所　　在　　地　　福井県福井市大手3丁目17番1号
担　　当　　者
所属・職名　　福井県教育委員会教育研究所　主任
氏名(ふりがな)　　冨澤　宏二　　（とみざわ　こうじ　）
TEL/FAX　　℡0776－36-4857　　FAX　0776-36-4860
E - m a i l　　K-tomizawa-m9@ma.fukui-ed.jp